

旧山川小学校所蔵の免田式土器

松崎 大嗣

はじめに

令和3年4月に指宿市立山川小学校、徳光小学校、利永小学校、大成小学校が統合し、新たに指宿市立山川小学校が開校した。小学校統廃合の際、時遊館 COCCO はしむれの職員によって、旧山川小学校の社会科資料室の整理を行う機会があった。教室内の棚には土器がいくつか展示されており、その中に今回紹介する免田式土器の破片があった。平成12年（2000年）に刊行された『山川町史（増補版）』にも本資料は紹介されておらず、これまで認識されてこなかった資料であると考えられる。そこで、今回資料化を行い、今後の基礎資料としたい。

1. 収蔵時の状況

旧山川小学校社会科資料室には、授業で使う地図や大型パネルに加えて、民俗資料が多数収蔵されていた。その中で、壁際の本棚の中に今回紹介する免田式土器が破片の状態で収蔵されていた。遺物以外には出土地点などを示すカードや注記等はなく、厳密に出土地点などを明らかにすることはできない。

ただし同棚に、胴部から底部が欠損した小型の無文短頸壺があった。この壺には、胴部外面に「山川上瀬氏発見」と墨書きされており、免田式土器の破片資料も旧山川町内出土の資料である可能性がある。これらの資料を時遊館 COCCO はしむれに持ち帰ったのち、クリーニングを行い、接合が可能なものについては接合を行った。その後、Artec Space Spider で3D測量、Artec Studio17 Professional と文化財ビューアーを用いて展開図や断面図を作成した。

2. 観察と型式学的検討

本資料は、頸部から先と胴の一部が欠損した免田式土器である。胴部はソロバン玉状に強く張り出し、最大径17.7cmを測る。残存高は9.8cmで、底部から胴部最大径までの高さが5.2cm、胴部最大径から頸部の立ち上がりまでの高さが4.6cmである。底部はゆるやかな丸底で外面には黒斑がみられる。外面は丁寧なミガキ調整が施され、その後に沈線による施文が行われている。頸部下には幅1.5mmから2.0mmの沈線が11本平行に施され、沈線の間隔は2.0mmから4.0mmほどである。沈線の始点や終点を示す痕跡は確認できなかった。

胴部には上向きの重弧文が沈線で表現され、胴部の稜線を基準に割り付けられている。現存では、10個の重弧文が確認でき、本来は12個あったと推定される。重弧文同士が切り合っているものではなく、離れているものでも3mm以内であるため、正確に割り付けされた上で施文されている。重弧文の円弧数は5弧のものと6弧のものがあり、配置は図1の通りで、規則性はみられなかった。沈線の幅は肩部の沈線と同様に1.5mmから2.0mmほどで、沈線同士の間隔は狭いところで2.0mm、広いところ



図1 本論で扱う遺跡

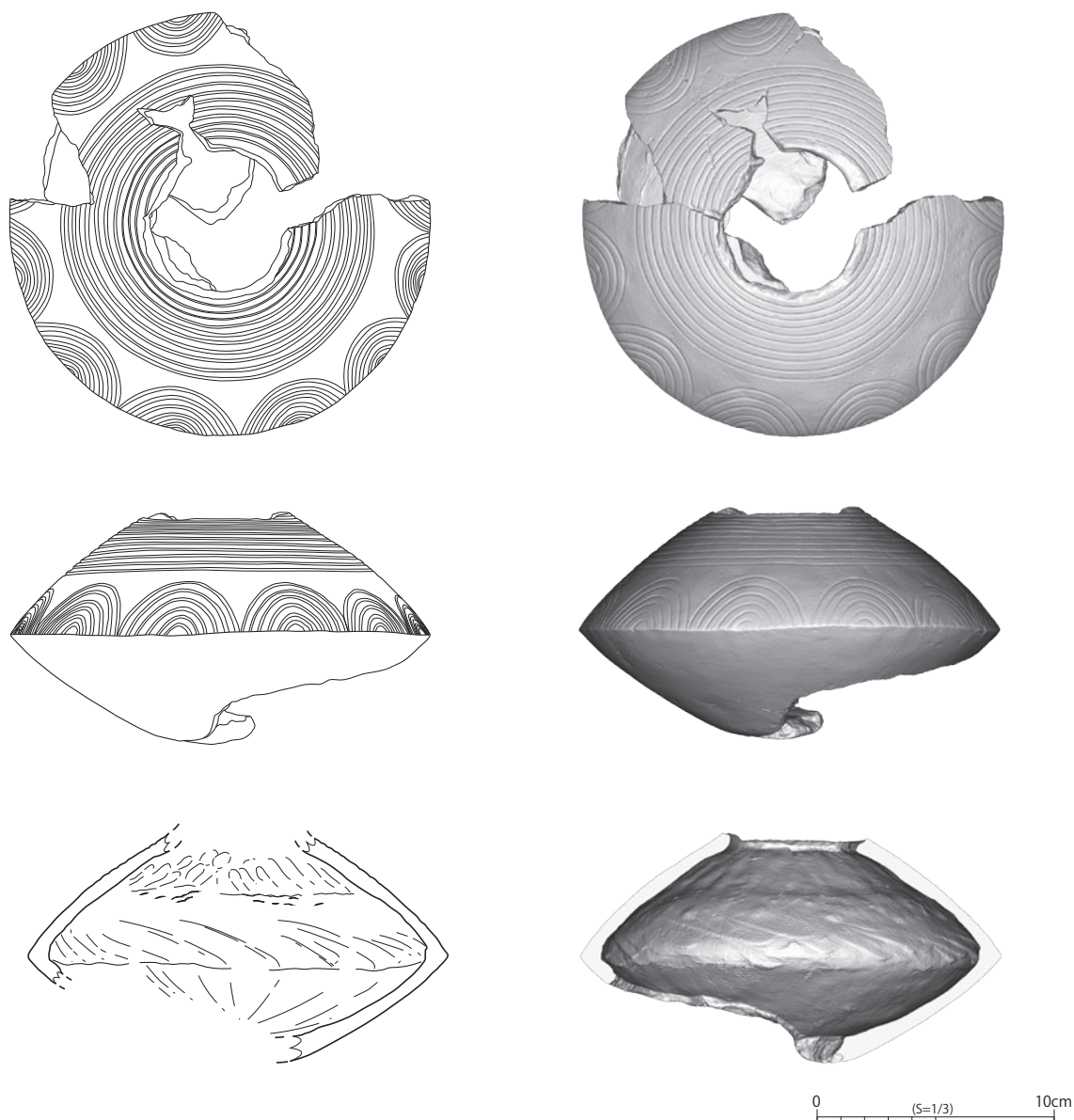


図2 旧山川小学校所蔵の免田式土器

ろで 5.0mmであった。

頸部は欠損しているため復元できないが、頸部の立ち上がりが一部だけ残存している部分を基準に考えると本来の頸部径は 6.0cmほどであったと考えられる。頸部の破断面は摩滅しており、頸部欠損後に再利用されていた可能性もある。頸部内面は接合による粘土の盛り上がりや連続したユビオサエの痕跡が確認できる。また、肩部内面には接合線が明瞭に確認でき、爪の痕跡もみられる。胴部最大径部分の内面には、工具ナデの痕跡が左から右へ連続で見られ、接合時による工具痕跡と判断できる。底部内面は放射状のハケメがみられ、器面は平滑に整えられている。内面には胴部の屈曲部に強い稜線がみられ、その上方には工具によるナデが連続で施される。

胎土は非常に緻密であり、一部混和剤に白色粒子が含まれる。発色は外面が 7.5YR にぶい橙 7/4、内面が 2.5Y 灰黄 6/2 であり、外面の一部はあざやかな橙色に発色する。

本資料は底部形態が完全に残っていないため判断が難しいが、ゆるやかな丸底をもつことが予想されること、胴部には上向きの重弧文を施すこと、肩部に複数状の沈線を有することなどの型式学的特徴か



写真1 旧山川小学校所蔵の免田式土器

ら、林麻穂による免田式土器編年（1998）のⅡ a 型式と位置づけられる。

3. 指宿地域における免田式土器

指宿地域では、これまでいくつかの免田式土器の出土が知られている。以下、説明する。

（1）成川遺跡

山川成川曲道に所在する遺跡で、弥生時代から古墳時代にかけての集団墓である。昭和 32 年の緊急発掘調査および昭和 33 年の文化財保護委員会（現在の文化庁）による発掘調査，昭和 55・56 年に実施された鹿児島県教育委員会による発掘調査，令和元年から令和 4 年まで実施された鹿児島女子短期大学・鹿児島国際大学による学術調査など複数次にわたる調査が実施されている。これまで、350 体以上の人骨やそれに伴う鉄製武器類，供献された土器などが確認されている。

免田式土器は昭和 33 年の発掘調査で出土しており，実測図から判断すると頸部から口縁部および底部は欠損しているようである。報告書では第三類土器として位置づけられている。頸部には沈線文が複

数条みられ、胴部には8重の上向き円弧文が施されている。胴部最大径には沈線が見られ、縦位の刻目が施されている。出土状況等は不明である。肉眼観察はかなわなかったが、胴部の膨らみなどをみると底部は丸底の可能性はある。これらの形態的特徴から林編年のⅢa型式であると推測できる。

(2) 南摺ヶ浜遺跡

指宿市十二町摺ヶ浜南の海岸段丘上に立地する弥生時代から古墳時代にかけての埋葬遺跡で、立石や土壙墓、壺棺墓、円形周溝墓など多様な埋葬方法がみられる点に特徴がある。また、出土土器は供献品としていくつかのブロックに分けられており、免田式土器はFブロックから出土している。Fブロックには複数の立石や土壙墓、壺棺墓が確認できるが、免田式土器とこれらの遺構との関連性は不明である。完形品で、器高24.2cm、最大径15.6cmを測り、胴下部には焼成後穿孔がみられる。底部は丸底を呈する。胴最大径に複数の沈線をめぐらし、それを切るような形で縦位の刻目がみられる。胴部には上向きの重弧文がほどこされる。肩部には18条の沈線が施され、上から13本目には縦位の刻目がみられる。全体的に丸みをもつ形態で、底部は完全に丸底を呈している。これらの特徴から、林編年のⅢa型式に位置づけられる。

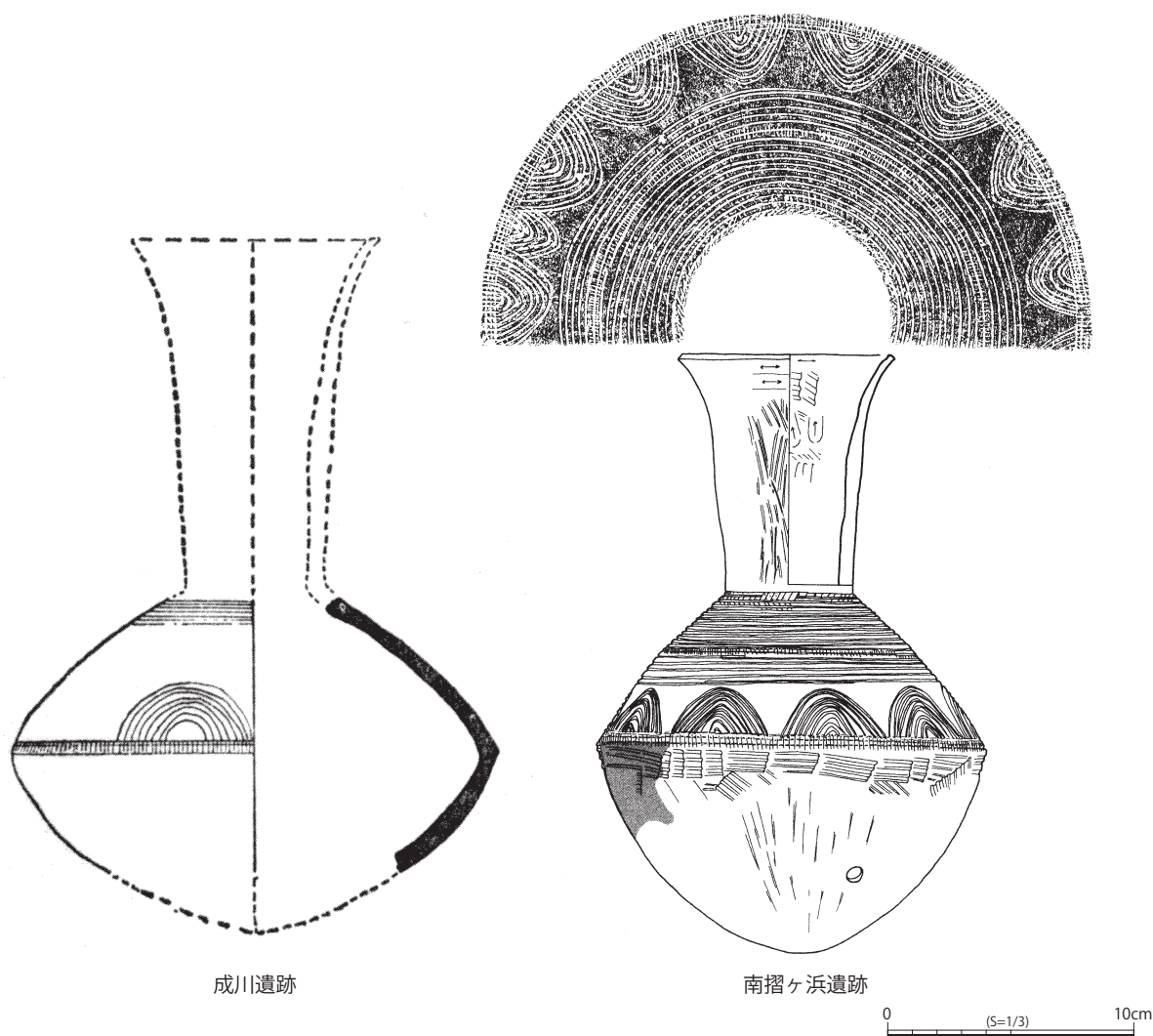


図3 成川遺跡と南摺ヶ浜遺跡の免田式土器

(3) 指宿市内出土

昭和 33 年に刊行された『指宿市誌』に掲載されており、「指宿市出土とつたえられるも出土地不明」と説明がある（河野 1958）。今回の報告に合わせて再実測したので、以下記述する。

本資料は、残存高 11.3cm、胴部最大径 20.5cm、底部から胴部最大径までの高さ 6.0cm、胴部最大径から頸部までの高さ 5.3cmを測る。底部はわずかに平底が残り、底部外面には黒斑が直径 16cmほどの楕円状にみられる。

胴部はソロバン玉状に強く張り出し、胴部最大径より 2mmほど上方に一条の沈線をめぐらす。この沈線を基準に上向きの重弧文が施される。重弧文は現状で 5 個確認できるが、本来は 9～10 個ほど施文されていたものと予想される。重弧文の沈線は幅 1.5mm から 2mm ほどで、浅く施文されているため、一部は摩滅により消失している部分もある。重弧文は 8 弧と 9 弧のものがあり、規則性は見出せなかった。肩部には削り出しによる段がつくられる。段数は 9 段で、段の幅は 3.5mm から 4.0mm ほどである。

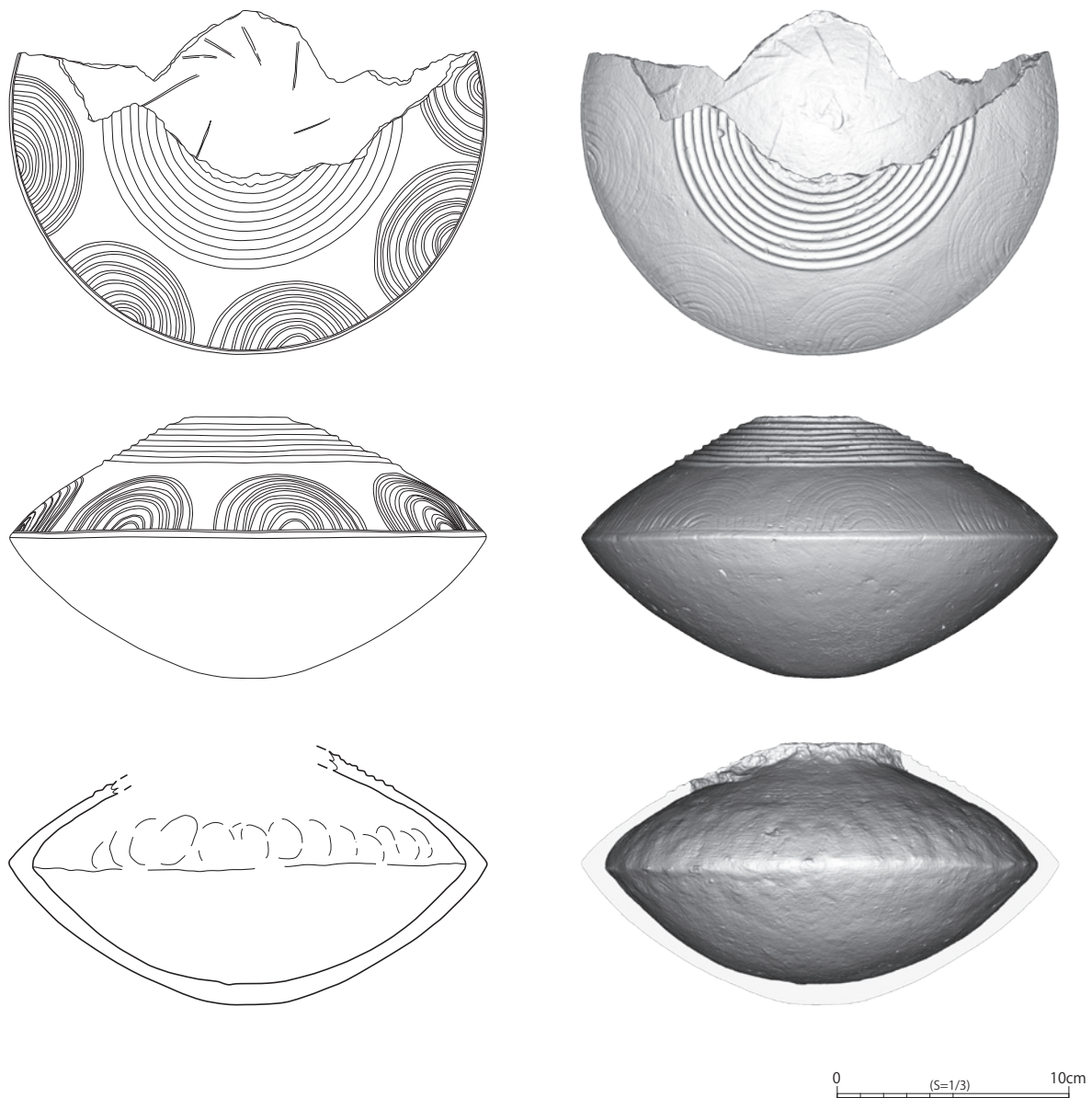


図4 指宿市内出土の免田式土器

胴部最大径の内面には強い稜線が見られる。内底面には連続した工具ナデの痕跡がみられるが、全体的に摩滅が著しく、調整は不明瞭である。胎土には径4mmほどの白色粒子を多く含み、ややざらついた質感である。これらの型式学的特徴から林編年のⅡa型式に位置づけられる。

まとめ

以上、旧山川小学校所蔵の免田式土器とあわせて、指宿市内における免田式土器について若干の検討を行った。旧山川小学校所蔵の免田式土器は、型式学的には林編年によるⅡa型式に位置づけられるものであり、同様に出土地は不明ながらも指宿市内出土の免田式土器もⅡa型式に帰属するものであった。

林の分類ではⅡ型式がⅡa型式とⅡb型式に細分されているが、Ⅱ型式の位置づけとして、熊本県を分布の中心としながら免田式土器が九州一円に広く分布する様相が指摘されている（林1998）。つまり指宿地域における上記二つの免田式土器は、先行研究で見られた土器動態と同じく、Ⅱ型式の段階における免田式土器の分布域拡大に伴うものと理解できる。残念ながら出土状況が明確ではなく、共伴関係なども追跡できないことから、個体の持つ情報しか得ることができなかった。指宿地域では、その後、Ⅲa型式の段階において、成川遺跡や南摺ヶ浜遺跡といった埋葬遺跡において出土が見られるようになる。

免田式土器はその形態的特徴や文様の特徴から、弥生中期の袋状口縁壺を祖型とした祭祀用土器としての位置づけ（西1987）や、時代が降ると集落遺跡でも出土が見られるようになることから、時期的にその意味合いが変化していること（中村1988）、免田式土器の中心地と周辺地では意味合いが異なっていたこと（林1998）などが指摘されている。遺構や共伴遺物との関係性によって、より深く免田式土器の年代的な位置づけや意味合いについて議論できるよう資料の蓄積に期待したい。

参考文献

- 河野治雄 1958「先史時代」指宿市（編）『指宿市誌』pp.33-104
河森一浩 1998「免田式土器の再検討―様式構造をめぐって―」『肥後考古』第11号 pp.1-32 肥後考古学会
田村晃一（編）1974『成川遺跡』吉川弘文館
中村直子 1988「免田式土器考」『人類史研究』第7号 pp.71-82 人類史研究会
西健一郎 1987「重弧文長頸壺」金関恕・佐原眞（編）『弥生文化の研究』4 pp.53-59 雄山閣
林麻穂 1998「免田式土器の編年と性格に関する再検討」『人類史研究』第10号 pp.156-170 人類史研究会